

いのちの葉

泥の中に咲いた花

大田利生

目次

私の全存在にかけて聞く	4
私に大きな安らぎを	9
調和のとれた世界	13
泥の中に咲いた花	18
むなしい人生にさせない	23
背を向けることなく	28
私へのはたらきかけ	32
仏の心と私の心	37
よき友をもつ	42
いかりは自分をも傷つける	47

私の全存在にかけて聞く

経教きょうきょうはこれを喩たとふるに鏡かがみのごとし。

しばしば読みしばしば尋ねれば、

智慧ちえを開発かいはつす。

善導大師『観経疏』序分義

表も裏もない

経典と向きあつて、直接その深い経意をうかがうことは容易ではありません。経典を読み進めるには方向づけが必要になります。それが高僧によつて著され

た論とか釈と言われるものです。

今回のご文もんは、『仏説観無量寿経ぶつせつかんむりょうじゆききやう（観経）』を註釈された善導大師のお言葉です。

『観経』には、極楽国土に往生するためにさまざまな行業ぎやうごうが説かれ、その一つに「読誦大乘どくじゆだいじやう」、すなわち大乘経典を読むという実践行がみられます。この四文字を説明されたのがこのご文です。

「経教」は経典と、説かれている教えをさします。それが鏡に喩えられているのです。

鏡の喩えで浮かぶのが『仏説無量寿経』の初めに、釈尊のお姿を「明浄なる鏡の影、表裏に暢とおるがごとし」と示されたご文です。明らかな鏡に映る像は、

表面を感じさせないほど美しく輝いているということでしょう。

このような譬喩によらなければ、釈尊のお姿をあらわしえなかつたのだと思われます。

釈尊が光で表されるということは、光を通して釈尊にお会いできるということです。鏡の影が表裏に暢るという言葉に、仏さまは、内も外も輝いておられることがあらわされていると考えられます。表も裏もないということでしょう。善導大師は「仏身は円満にして背相なし」とも言われます。

われわれ凡夫ぼんぶには、表も裏もあります。だから清らかなところはもちえないということなのです。

自と他が一如に

「しばしば読みしばしば尋ねれば」に大切なことが表されています。

「読む」から「尋ねる」という深まりを知ることができるのです。「尋ねる」には、私の全存在をかけて聞いていくという姿勢が滲にじみ出ているのです。「読む」にもそういうところは潜ひそんでいるといえますが、「尋ねる」は、それがよりはつきりとしてくるようです。經典の真意にふれることができるのですれば、尋ねるといふところがあつたからと言えましよう。

最後は、「智慧ちえを開発くわいはつす」。

私たちは、自と他を区別し、その間に距離をおいて生きています。しかし、經典を読み尋ねていくなら、他の中に自己、自己の中に他をといふ自他じたいち一如いちよの